

(一社)静岡県動物保護協会長賞

ツバメのピーちゃん

御殿場市立御殿場小学校

六年 鈴木 大介

それは、雨が降っている時におきた。学校の帰り道、お墓の駐車場に黒い物があつた。近くに寄って見たら、それはツバメの子どもだつた。ツバメに逃げる様子はなく、ただうずくまっていた。周りを見渡しても親鳥の姿はなく、巢も見当たらなかつた。このままでは雨もひどく、食べ物がないので死んでしまうと思ひ、僕は家を持ち帰つた。元気がないので、僕はまず、えさをあげてみることにした。たまたま僕の家には、生まれたばかりの鈴虫がたくさんいる。ツバメは虫を食べるということを知っていたので、僕はかわいそうだと思ひながらも、ツバメのためにあげることにした。鈴虫を弱らせ、ピンセットでつまみ口の前に持っていくと、パクリと食べた。何回も何回も食べた。僕はその時、決心した。ツバメが飛べるようになるまで、僕が育てて逃がしてあげようと。毎日エサをやっているうちに、僕を親とかんちがいしたのか、もうう時、

「ピーピー」

と鳴くようになった。かわいくなってピーちゃんと名前をつけた。僕が学校に行っている間は、ミルワームを入れ物に入れて

置いておいた。帰ってみると、入れ物が空っぽになっていた。一人でえさを食べられるようになってきた。体力がついてきたのか、羽をバタバタさせて飛ぶ練習を始めるようになった。拾つて家につれてきて一週間。いよいよピーちゃんが家の中を飛び回るようになった。ぶつかつてけがをする前に逃がさなければならぬ。だけど僕は、この一週間でピーちゃんのことをかわいくなりすぎて、逃がすのがいやになってきている。だけどツバメは渡り鳥なので、仲間のもとに帰してあげなければ一人ぼっちになってしまう、この寒い御殿場では生きていけない。早く仲間のもとへつれて行くことにした。仲間のツバメたちは、ピーちゃんを拾つた場所からほんの少しはなれた高架線の上の方にいる。ツバメは朝早くから活動しているので、僕が学校へ行く前に逃がすことにした。当日、ピーちゃんを仲間がいる近くのフェンスの上に乗せ、仲間が来るのを待った。すると一羽のツバメが、ピーちゃんの前でホバリングを始めた。僕は安心してその場を立ち去り、学校に行った。学校帰り、もう一度フェンスのところへ行ってみると、ピーちゃんの姿はなく、死がいのなかつた。僕はピーちゃんが仲間のところに戻れたと信じている。来年もまた、僕のいる御殿場に帰ってきてほしい。

元気でね、ピーちゃん。